

昨年一年の世相を表現する漢字として「偽」が選定されたが、工事の偽装、製品の偽装、食品の偽装など、詐欺ともいえるような企業倫理の劣化が際立った一年であった。その一連の事件の処理で目立ったのが赤福や船場吉兆などの二世社長の言動である。赤福の場合、創業三百年余の老舗であるから二世というわけではないが、先代の業績があまりにも著名であるため、実質は二世である。

ニュース番組で何度も放送されて有名になってしまったが、四苦八苦している息子の記者会見を見兼ねた母親の手助けの光景は、二世という立場を象徴していた。それらと比較すれば、ミートホープや石屋製菓などの社長（当時）の言動は創業一代で有望企業を育成してきた実績を背景にした強靱なもので、それが企業の不当な行動の正否を逆転させるものではないにしても、創業と継承の差異は明確であった。

二世ということが問題になっている分野はいくつもある。大学の教授人事は透明といたいがたい慣習で決定され、講座という零細企業の店主である教授が自分の弟子という二世を跡継ぎにしたり、一步拡大しても、母校出身から任命する純血主義が通例であった。それによって日本の大学の研究能力が劣化し、最近では一般公募に転換する大学が急増した。成果は明瞭で、この転換により蘇生した大学や学科も数多く存在する。

日本の国会議員も二世が跋扈している典型分野である。定員四八〇名の衆議院議員数のうち、現状では約四〇％に相当する一八五名が二世以上であり、そのうち三名は四世、四三名は三世である。アメリカでもブッシュ現大統領は二世、現在は引退しているが以前のゴア副大統領も二世であるが、それが二桁の比率になることはない。選挙で選出される国民の代表が世襲職業になっているのは独裁国家か発展途上諸国である。

二世もしくは世襲の問題はいくつもある。筆者はスキーで山登りをするバックカントリースキーをするが、先頭はラッセルという雪掻き作業を要求される。太腿以下が雪中にあって進行する先頭と二番以下との体力の消耗は大差であり、隊列の命運を左右する進路の判断も先頭には重圧となる。スキーと企業経営や政治活動を同類とするには異論があるにしても、先頭に要求される肉体と精神の強靱さは類似している。

生物学的もしくは遺伝子的な問題もある。近親の結婚が禁止されているのは、限定された遺伝子群の内部で交配を継続すると生物は確実に劣化することが理解されているからである。それが人間の集団である社会に適合できる理論かどうかは疑問があるにしても、ある程度の類推は可能である。先述の国会議員の二世比率は与党で四六％、野党で二九％であり、それぞれ二代以上の親交があるとすれば、熾烈な闘争は期待できない。

世襲の跋扈は新規参入への障害ともなる。スイスの調査機関が世界五三カ国について起業精神の程度を調査した結果によると、日本は五一番目、新規に起業する意欲の欠如した国家となっている。それは政治についても同様で、世襲政治が支配する社会で新規に当選することは容易ではない。ある意味では安定した国家と理解することもできるが、急速に変化する世界で、新鮮な血液が不足している社会は劣化していくことになる。

近代の日本で世襲が崩壊したのは明治維新と第二次世界大戦敗戦後の二回である。いずれも外側からの圧力による崩壊であるが、その結果、新規の企業が次々と登場し、政治も活発になった。山林の火事は被害甚大であるが、その一方で老成した森林を代替する新鮮な森林が形成される。現在の世襲社会を何者が崩壊させるかは明確ではないが、この閉塞した構造を終焉させる必要はある。